

豊かなつながりのある学級づくり — つながる力を育む生活・教科指導のありかた —

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域
酒向 浩司

I. はじめに

1. 教職大学院進学の意味

私は大学教育の中で自分の教師としての力量が十分に身についたと言える自信がなく、「専門職」として教師という職業、立場がどのようなことを意味するのか今一度考えたいと思い進学を決めた。この2年間の学びや経験、出会いは私の教師としての自覚を一層高めてくれ、自分の期待していた以上の成果を感じている。この報告書をまとめるにあたり、はじめにこの大学院に進学したことの意義を自分なりに書いてみようと思う。

(1) 理論と実践

大学院の授業は、既設の大学院のように個人の研究を進める形ではなく、現職の先生と学部直進の学生と一緒に「学級づくり」「授業づくり」「学校づくり」に関する授業を受けるスタイルが取られている。そこで行われるチーム・ティーチングの授業は、理論の伝達のみではなく理論とそれに対する私達の疑問・質問、先生方の実践の検証など多くの要素を含み、理論と実践相互の活発な意見交換のもとに進められていく。つまり理論と実践のつながりや違いを感じながら、全員が納得するまで話し合ったり新しい考えを導き出したりできるため机上の空論で終わることがない。それに加え多くの実習の機会が設定されていて、基礎領域の学生も学んだことを実践する場が多くある。

(2) 教職に対する責任感

さらに2年次はすべて実習に充てられ、多くの学校や教育現場にかかわりながら学びを深めることができる。その中でも1年次の後期より卒業まで1年半という長期間、三吉小学校にお世話になった学校サポーター実習は特筆すべきものだ。教育実習などと大きく違うのは、子どもを長期間継続して見ることができるためその変化や成長を実感できることや、年中行事に対する教師集団としての取り組み方を間近で見ることができることだろう。

学校からも学校職員の一員として迎えていただき、ボランティアとして宿泊研修や修学旅行にも無理を言ってお同行させていただいた。そういった経験から次第に勤務校としての実感が湧くと同時に、一教師として

の使命感や、子どもの成長に携わる者としての責任感が強くなっていった。それは実践に対する緊張感を生み、心から子どもたちのために実践をしたいという思いをもたせてくれた。うまくいかなかった授業は子どもたちに申し訳なさを感じると同時に次の授業への意欲をもたせてくれる。一人ひとりとの心のつながりを自分自身強く感じた場面でもあった。

(3) 出会いの素晴らしさ

出会いというものによって人生が左右されることが多くある。この2年間は学校や実習すべてを含め、自分の人生を左右する出会いばかりであった。大学院と一緒に学ぶ応用領域の方々からは地区ごとの魅力と特色、現場の現実を教えていただき、実習で出会ってきた先生からは多くの実践を、身をもって示していただき、子どもたちからは愛情と信頼を教えてもらった。すべてが自分の背中をさらに教職に向けて押してくれている。その現実打ちのめされそうになったこともあるが、それは、現実を見つめ目の前の子どものために全力で接することからすべてがはじまるという気持ちと、それでも心から訴えたい理想が胸の中を渦巻く不思議な高揚感につながっている。

私は岐阜県出身で愛知と岐阜のどちらがいいか、という気持ちで進学してきたがこの大学院に入って一ヶ月もたたないうちに気持ちは愛知へ向いていた。それは心から尊敬できる仲間達と出会うことができたからである。それに心から感謝したい。4月からはこの愛知県の教育に携わるものとしてさらに成長していきたい。

II. 実践テーマ設定の理由と課題

教師は授業が基本であり、学級経営と授業づくりはどちらか一方が上手くいくということはない。学級が上手くいっているということは授業が上手くいっているということであるし、逆もまた言える。現場で何人もの先生の実践を観察し、まずは学級の子どもの把握力と授業力の基礎・基本を磨き、幅と奥行きをもたせることが重要であることがわかった。

そのため私は「学級経営の視点から、生活指導と教科指導の両輪のあり方」と「生活・教科指導を通じた教師と子ども、子どもと子どものつながりの構築」と

という方針で実践することとした。それは毎日の生活を観察し実習を重ねるうちに、子どもたち同士が関係する場面が思っていたよりも少ないのではないかと感じたためだ。「かかわり合う」や「共に生きる」という言葉が多く聞かれる中で、子どもたちはそういった力をどこで身に付けるのか。それは当然彼ら唯一の社会生活の場である学校である。では、毎日の学校生活をさらに活発で関係の深いものにするにはどうすればいいのだろうか。さらに言えば人と人が「共に生きる」以前に相手と「つながっている関係」とは何か、感情や感動を共有し共に学び合うこととは何か、ということを考えたいと強く思った。そしてそのために教師には何ができるか。子どもたちの現状や実習を元に考えてみた。

1. 教育現場に求められるもの

平成20年1月の中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」において、「知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させるとともに、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。」と示されており、そういった社会に生きる私達やこれから社会を形成していく子どもたちには「自己との対話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる、積極的な「開かれた個であること」が求められている。つまり「自立した個人による社会のまとまり」を実現しようとする概念であることが読み取れ、「自立」しつつ「共生」という高い理想のもとに書かれている。こういった箇所を読み取るだけでも新学習指導要領において求められるものの多さがわかる。

2. 他人と「つながる」こととは

学校は家庭と並び子どもたちの生活の大部分を占める場である。彼らにはその社会の中で他人と分かり合い、協力し合いながら自分のアイデンティティを確立していくことが求められている。それは将来彼らが社会の形成者として生きていくために必要な能力であろう。

当然それは教師や親の支援や指導を得ることが前提となっている。教育現場における学校・学級経営は、普段の生活指導や子どもたち指導、教科指導、行事などを通して、そういった子ども一人ひとりの成長を願うことを基本理念として展開されるべきであるし展開されていると思う。しかし学校教育現場を取り巻く環境や、周囲の目は厳しい。学力低下の問題や教師モラルの問題などにより、不信感をぬぐいきれない保護者の方が多い。それは教師と保護者、地域も「つながり」がないといえる。まずは子どもたちの周囲から教育環境を整えることからはじめなくてはいけない。

これまで、新聞や雑誌、論文を読んだり、多くの実習の中でいくつもの学校や学級、何人もの子どもたちと関わったりしてきた。その中では現在の子どもの状態と、抱える問題が見えてきた。

3. 各種実習から見る子どもたちの今

(1) つながりの未発達な現状

現在子どもたちの生活を見ていると以下のような様子が見られる。

- ・ 自制心をもって我慢したり歩み寄ったりすることが少ない。
- ・ 相手の怒りの限度がわからずすぐにけんかになる
- ・ 自分の気持ちを表現するすべが少なく。
- ・ リーダーシップをとって物事を解決していく経験が少なく。
- ・ 友達以外とのつながりが希薄（気の合う仲間としかかかわれない）。
- ・ 自分にかかわりのない問題やでき事には無関心
- ・ すぐに相手に問題の原因を求め、自分の行動を省みようとしなない。

各種実習によって多くの小学校に訪問させていただき子どもたちとかかわっていると、学校生活に対する充実感を感じている子どもが少ないように感じる。そして一見他人へ向かっている言動の要因が、その子自身の自己否定感からくるものではないかと感じられる場面も多々ある。

本来学校は優越感や劣等感が生まれやすい場である。それはテストや成績、スポーツなど他の子どもと比較される（または比較してしまう）要素や場面が多いからである。それは教師が意識していなくても起こりうるものであり、それによって自己否定感が生まれてしまうことがある。その反面、それが子どもたちの競争意識や向上心に転換されていくことが多いことも事実である。しかし、そういったプラスの力へ転換されるためには教師や親から全面的なサポートを受け、安心して学習できる環境があるためである。それらは自然発生的に起こるものではないということを教師や親は把握しておく必要がある。そして子どもたちの自己有用感や自己肯定感をどのように高めていけるかということも併せて考えていかななくてはいけない。

(2) つながりを求める子どもたち

子どもたちの抱える問題が自己否定感から生じる部分が大きいのではないかと述べたが、そうすると彼らの行動一つひとつに対する指導の姿勢も考えていかなければいけない。

つながりが上手く構築できていない現状とは対照

的に、私が学校サポーターとして週に2回出勤する度に多くの子が数日を遡って報告をしてくれたり、悩みを打ち明けてくれたりすることが多くあった。そこから子どもたちは深いつながりを求めているのだとわかる。聞いてほしい、わかってほしい、受け入れてほしい、愛してほしいという気持ちを強く訴えているように感じた。

そういった私と子どものつながりを嬉しく感じる反面、家族や友達同士でつながりが足りていないのではないかという不安もある。あくまで私は週に2回しか顔を合わせないし、継続的な対応をすることができないからだ。そのため担任の先生に任せてしまうことが多い。自分が担任であったらと考えても、40人近くの子どもたちを十分に観察し、対応できるかどうか非常に難しく感じるところでもある。

そこで重要になってくるのが子ども同士のつながりだ。教師がケアしきれない部分や休み時間、通学班でのつながりが子どもたちの安心できるものであってほしい。そのために学級や異年齢集団において人間関係を形成することが求められる。

現代の子どもたちの様子として、つながることの意味がわかっていない場合と、つながっているのに気づくことができていることいえることが挙げられる。前者の子どもには学習や生活の中でその方法を教えていくことができれば、その中で自分なりに周りとのつながることを理解していく。しかし、後者の子どもはさらに、気付いていない場合と無意識のうちに拒絶している場合とに分けられる。自分は愛されていないと思ったり、なんとなくむかついて周りとの関係を拒絶したりする子どももいる。

(3) つながりがもたらすもの

子どもたちは学校に何をもってくるか。はじめてその質問を受けた時は何を言えばいいかわからなかった。「子どもたちは楽しみも喜びも不安も悲しみもすべてをランドセルに詰めて背負って登校してくる」それは現場に出て、長期的に子どもたちと関わることにより初めて実感したことだ。

毎日の顔つきはもちろん、ささいなことでもけんかになるなど、子どもは様々な方法でメッセージを発信している。教師はそれを敏感に感じ取らなければならない。細やかなケアによって子どもたちの精神状態の安定を保持してやることは安心して学習できる環境づくりの基本でもある。そのために教師が子どもと信頼関係を構築するというのがその基本であるといえる。

現代の子どもたちに必要なことは人とのかつなかりを信じることだろう。孤独を感じづらい気持ちになってしまう時、自分の心の中でつながりを信じることさえできれば頑張ることができる。それだけでなく、社会に出た時、いつも誰かが自分を支えてくれていると

いう感情が他人を信じることにもつながり、温かさや優しさを受け、良い人間関係を構築する力につながるのではないかと思う。

Ⅲ. 教職大学院における実践の報告と学び

1. 教師と子どものつながりー5月・教師力向上実習Ⅰからー

教師力向上実習Ⅰは学級づくりに重点を置いて行われる実習である。学級が4月からどのようにスタートして組織されていくのかを学ぶものである。サポーター校では4月から学級を固定していただき、4年生で1年間実践をさせていただけることとなった。

(1) 学校・学級の実態

ー学校サポーター実習からー

今回実習を行うみよし市立三吉小学校には1年次の9月から学校サポーターとして実習をさせていただいてきた。

はじめに、三吉小学校はみよし市南部に位置し、田んぼや畑が広がるのどかな地域である。昔ながらの家庭が多く、保護者の方で三吉小学校出身という方も多い。昨年度30周年を迎えた際には、その記念式典の運営を卒業生、つまり子どもの保護者の方々がされた。伝統のマテバシイ煎餅は、校庭に実るマテバシイの実と地域の方から無償で提供していただく牛乳や卵を使い、毎年、PTAの方々が1ヶ月程かけて全校、そして学校祭で販売する分まで焼いてくださる。非常に地域と密着した学校という印象が強い。

次に、三吉小学校の子どもたちは明るく素直である。休み時間には外で遊ぶ様子も見られる。地域でも帰宅してから近くの広場でサッカーをしたりするという話を聞く。後期の清掃活動を異学年集団で行ったり通学班で登下校したりする様子から、学年間の仲も良いと感じる。

しかし、観察をしていると特定の仲間としか関わることができない様子がみられる。特に学級の生活場面で見られることだが、例えば、些細なことから叩き合い蹴り合いのけんかになってしまったり、自分と違う意見をすぐに否定したり、すぐに白黒つけたがったり、自分の関係ないことは支援できなかったりなど、私が考える現代の子どもたちのつながりが未発達な現状と同じ内容である。

これら現状を踏まえ、実習計画を立てることとした。

(2) 実習計画

① 教師力向上実習Ⅰのテーマとねらい

本実習では学級びらきから教師と子どもがどのようにつながりを築くことができるか観察・実践した。そして実践とメンターの先生の学級経営に対する考えをふまえて今後私自身がどのような観点をもって学級経

営をしていけばよいのかというビジョンをもつことが目的である。

そこで学級の初めの時期ということで、本実習では学級への帰属意識を高めることを大きな目標とした。その達成のために係活動やレクリエーションを重点に置き実践することとした。

実習のテーマは以下のように設定した。

「子どものやる気を引き出す学級づくり」
—学級レクリエーション・係活動の
充実による学級の活性化—

次に実習のねらいは以下のように設定した。

- ・子どもたちが学級の仲間に興味・関心をもって生活ができるようにする。
- ・日常生活の中の事象に広く感動できる豊かな心を育てる。
- ・学級への所属意識を高める。
- ・自己肯定感を育てる。

(3) 実習経過

① 学級独自の係活動

- ・**ビンゴ係**
定期的にビンゴゲームを行う。
- ・**お笑い係**
休み時間や給食後の空き時間にコントをする。
- ・**クイズ係**
帰りの会などにみんなでクイズをする。
- ・**新聞係**
学級であったことや、みんなの好きなものを調べる。
- ・**いいこと見つけ係**
学級でいいことをした子をみんなで見つけ、ノートを用意してそこに書いてもらう。

4月に学級を組織する際、学級委員や給食係など主立った係を決め、さらにメンターの先生が「こんな係があるよこのクラスがもっと楽しくなるんじゃないかな、と思う係を考えてみよう。」と子どもたちに考えさせた。すると以下のような係が提案された。

子どもたちが考えた係はどれも計画的といえるものではなく、そのメンバーも自由選択制で人数や構成員に偏りがあった。

しかし、この係活動に対する子どもたちの意欲は自分が想像していた以上のもので、それに必要なものは自分たちで手作りをしたり先生に時間をもらえるようお願いしたりと、自主的に行動することができてい

た。さらに、人数が多い係はA班B班に分けたりお笑い係や新聞係はクラスのマスコットを作成したりと、それぞれに創意工夫がなされた活動が展開されていた。

私の中でも気にかけていたのは「いいこと見つけ係」である。4月に組織されてから、なかなか動くことができていなかった。

この係を生かすことは、私の目指しているつながりのある学級を実現するためにも必要なことだと思った。活動の中で子どもたちが互いに興味をもつことができ、さらには互いの行動を評価しあえると思ったからだ。そういったつながりは大切にしたい。

うまく活動できていない原因としてその係を提案したのが普段あまり積極的に発言するタイプの子どもではなかったことと、構成員がわずか2人であったことが考えられた。私は何とか彼らの活動を支援できないかと考えた。

② いいこと見つけ係の活動支援

(構成員2名を以下A男とB男とする。)

私はまず、A男がどのように活動を展開していきたいのか聞くことにした。A男は、友達のいいところや自分の自慢できる特技など、なんでも書き込んでもらってそれをみんなの前で発表するというのを考えていた。

それを踏まえ、私はそれをどうやってクラス全体を巻き込んだ活動に発展させていくのかをA男B男と考えることとした。そこでまとめた内容は以下になった。

- ・自分の自慢はなかなか書きにくいので、まずは友達の良いところをたくさん書いてもらえるようにする。
- ・たくさん見つけてくれた人は表彰する。
- ・帰りの会などで発表する。
- ・誰が見つけてくれたのかを書く欄も設け、それも一緒に発表する。
- ・たくさん書いてもらえたらお楽しみ会ができるようにして、みんなに協力してもらえるようにする。
- ・まずは10個、その後お楽しみ会の度に目標を20個30個と高くしていく。

A男とB男は学級をまとめた意見や意見を積極的に示したりという経験の少ない子どもだったが、活動の方向性が明確になるにつれ、「お楽しみ会のプログラムは俺が考える」「賞状は俺が作る」というように、主体的に活動できるようになっていった。

活動を帰りの会で全体へ伝えようと、今までなかなか興味を示していなかった子どもたちも意欲的に参加してくれ、すぐに目標の10個を達成することができた。

私はお楽しみ会の企画をA男とB男に任せたものの、会の運営・進行は普段から慣れている学級委員に任せた方がいいかと聞いてみた。すると即答で「自分たちでやりたい」という言葉が返ってきた。当日は彼らの八面六臂の活躍により、お楽しみ会は大成功のうちにおわった。クラスメイトの楽しそうな顔を見て、会の後はA男B男ともにとっても満足そうな顔をしていた。



お楽しみ会後の集合写真

ここで重要なのはA男とB男同士が、もともと教室でほとんどつながりをもっていなかったということだ。この係活動をきっかけとして少なからず互いを意識し、つながりを築けたということはとても大切なきっかけである。

こういった「きっかけを生み出す活動」を設定することが、つながりを築くための大切な要素であるとわかった。

③ 授業実践 一 道徳の実践から一

この実習では普段から算数や国語の授業をさせていただいた。授業では、つながりを生み出す学習活動の設定以前に、基本的な授業構成力の無さや子どもも把握力がまだ足りていないことをただただ痛感させられた。メンターの先生に毎時間指導をいただきながら子どもの意見をいかに広げていくかということなどをひとつずつ考えることができるようになっていった。

三吉小学校は道徳の研究に力を入れており、研究授業は私も道徳でさせていただくこととなった。

ア 主題

すがすがしい心で（1－（3） 勇気）

イ 資料名

「ろう下そうじ」（出典：光村図書）

ウ 主題設定の理由

正しいことや正しくないことについての判断力が高まっているこの時期の子どもたちにとって、勇気を

もって行動することとは、周りに流されたり、自分の弱さに負けず行動したりすることである。正しいことを求め、正しくないことを許さないという心情をもつことは、社会生活を営む上で重要なことである。しかし、この時期の子どもたちは、恐怖心や恥ずかしさ、誘惑、利害関係などが妨げになり、勇気をもって行動するということが、なかなかできないようだ。そこで、正しいことを行えないときの後ろめたさや、後悔の念と、勇気を発揮したときの自信と誇りについて考えることを通して、正しいと判断したことは勇気をもって行い、正しくないと判断したことは勇気をもってやめる態度を育てたいと考えた。

子どもたちは4月から新しい仲間との生活をスタートした。観察をしていると特定の仲間としか関わることができない様子がみられる。例えば、些細なことから叩き合い蹴り合いのけんかになってしまったり、自分と違う意見をすぐに否定したりする様子が見られた。他にも、4月当初は誰からも注意する声がないために、廊下に並ぶだけでも、何度もやり直しをしていた。最近では、普段の生活や掃除の時間にいけないという行為に対して注意の声が聞こえるようになってきているが、ほとんどは自分で言わずに教師に後で報告するという形である。そこで、子どもたちには、正しいと判断したことは、勇気をもって声に出して言うことが必要であることを知らせ、それによって自身が心地よさを感じることができるということを伝えていきたい。

この資料は、掃除をしっかりとしないといけないと思っているのに、友だちにつられてついおしゃべりをしてしまう「わたし」が「大石さん」（共に資料内の登場人物）の注意する姿を見て、自分の行動を見つめ直し、勇気をもって班の仲間掃除をしようと呼びかけるまでの、心の変化を中心に展開されていく。「わたし」は、周りに流されていても、善悪の判断はできている。しかし、その自分の判断を、行動に移すことは、非常に勇気のいることである。そんな状況は子どもたちの生活の中で多く見られるのではないだろうか。この資料を通して、自分の生活を振り返らせ、勇気をもって行動することの大切さを感じ取らせたいと思い実践をした。

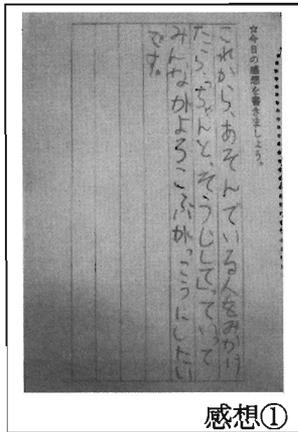
エ 授業後の児童の感想

授業に対する子どもたちの感想から数点示す。

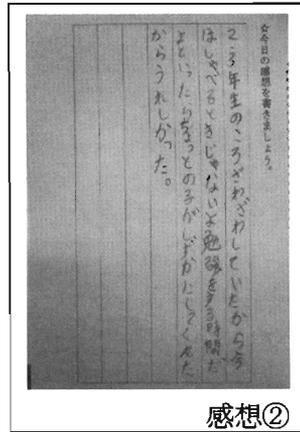
感想①の子どもは掃除という枠にとらわれてしまっているが、自分の行動を省みてこれからの行動を示すことができている。さらに、「みんながよろこぶがっこうにしたい」という言葉から、自分の行動によって周りを変えていきたいという意味が感じられる。

感想②の子どもはこれからの自分の行動を書くことはできていないが、自分の経験から、勇気をもって

行動したことに対して、周りが応えてくれたことで「う



感想①



感想②

れしかった」と書いている。

感想を書かせることで子どもたちが私の授業でどのような思いを抱いてくれたのかということがわかった。授業の感想などを通して、自身の授業を反省すると同時に、つながりのきっかけを見つけることができるということもわかった。

道徳に限らず、今までの学級経営の様子を授業に反映させ、授業を今後の学級経営につなげていくという視点を常にもち続けなければいけないと感じた。

(4) 実習の成果

① 4月の大切さ

4月、新しい学年を迎える子どもたちの心は不安と期待にあふれている。それを教師はどのように受け止めるかということが重要である。

例えば、「4年生でがんばりたいこと」を書かせた時、それは当然前向きな目標であるが、それと同時に「僕、私はこうなりたいから、先生お願いします」という教師への要求や昨年までできなかったことへの不安の表れでもある。

この一カ月の間に子どもたちが安心して生活できるように、まずは全力で受け止めることが大切である。

② 学級へ愛着を抱く

この時期は学級目標決めや組織づくりなど、学級の基礎を築く時期である。学級独自の係や自分たちが決めたクラスのルールなどがあると、子どもたちが学級への愛着をもつことができる。

③ 1年間の見通し

学級経営に大切な要素はどのような学級にしたいかという見通しと、そのための子どもも把握である。前担任などからの申し送りを参考に一日でも早く把握することが求められる。そしてある程度の見通しをもち、逆算して学級経営案を作成することが大切である。

④ C男の変化

これは実践の成果というより、校長先生や相談員の先生に指摘していただいて気付いたつながりである。その指摘は、C男は登校しぶりが見られたり、学校へ来てても脱走したりと手のかかる面が多々あったのだが、私が来ている月曜日や木曜日、実習期間中はそれが少なくなったというものだった。

私はC男自身が成長し、我慢強くなったのだと思って見ていた。しかし、そこには私とC男だからこそのつながりがあった。

4月当初から彼が不安定であることは教えていただいていたので、積極的にコミュニケーションをとるようにした。あいさつから始め、前回のサポーターの時に休んでいた場合は「月曜日は休んでいてさみしかったよ」など声かけをするようにした。休み時間には一緒にサッカーをしたり、脱走した時は捕まえるまで追いかけ続けたりした。次第につながりあえてきたら授業中の姿勢や鉛筆の持ち方を細かく注意するようになっていった。こちらから変化を与えようとしなくても、まずつながることによって子どもの行動が変化していくのだということにとても感動した。

2. 人としてのつながりー8月・多様なフィールド実習からー

多様なフィールド実習では名古屋市にある、子ども適応相談センター「なごやフレンドリーナウ」で行った。この施設は市内に住む心理的理由によって登校できない小中学生を対象としている。学校を通して通所申込をするため、ここへの通所は学校で出席とみなされる。

(1) 教師という肩書きの意味

施設内のすべての部屋は「〇〇教室」や「〇〇室」という名称でなく「〇〇のへや」である。職員も「〇〇先生」でなく「〇〇さん」と呼ぶ。それはそれらの言葉から学校を連想してしまうからである。つまり通所する子どもたちは「教室」「先生」という言葉自体に抵抗をもっている子が多いとわかる。

彼らは決して学びに意欲がないわけではないし、同じように通所している子たちと良好な人間関係を築くこともできている。特に大人が嫌だというわけでもないようで、自分も含め学生ボランティアや所員の方ともしっかりと関係ができています。もちろん初めは警戒する様子を見せるものの、話しかけるとつながってくる。

そんな子たちがなぜこういった状況まで追い込まれてしまったのだろうか。そうなる前に学校や教師はなにか支援することができなかったのだろうか。

(2) 未来への不安と希望

フレンドリーナウで出会った中学生の女の子が書いた詩を紹介したい。

この空のように青く美しく、羽ばたく鳥のように明日に向かって飛び立とう。

想像したって見えない僕らの未来、まるで暗闇の中にいるみたい。

(中略)

人のまねをすることが自分らしさなのかな。人に流されてるのが自分らしさなのかな。「何かが違う」心が叫んでる。自分らしさってそういうことじゃないんだ。きっと自分に意味があるんだ。

(中略)

倒れたって泣いたっていいんだ。そこであきらめたら終わりなんだよ。

ちっぽけなつばさでも飛び続けて。

きっと目の前に必ず希望があるから。

彼女はいつも明るく、周りのみんなを巻き込んで積極的に場を盛り上げるようにふるまっている反面、常に気を配って声をかけたり、様子がおかしいと「○○ちゃん大丈夫かな」などと声をかけたりしてくる。

彼女が唯一自分を素直に表現できるものが「詩」であった。共に実習を行った学生と詩に感動しほめた。しかし、ほめた次の日には格好をつけた言葉の並んだ詩を書いてきた。彼と私の2人で「もっと君の思うままに書いて欲しい」ということを伝えたところ、彼女なりに本音をぶつけてくれた。

彼女の詩を読むだけでも思春期の子どもたちがもがき苦しんでいる様子や、周りを信じることのできない子の気持ちが伝わってきた。彼らはみんなとつながりたいし、未来に向けてもっと成長していきたいと願っているのだ。

(3) 実習の成果

① 「子どもたち」ではなく一人の人間として

この実習では、教師と子どもたちである前に一人の人間であると改めて実感させてもらえた。いつも多くの児「子どもたち」に囲まれて、1対多数の状態に慣れてしまうと、その日1日「みんな」が笑って過ごすことができれば、というように全体を対象として見るのが当たり前になってしまう。そうではなく、毎日一人一人と言葉を交わし、心を通じ合わせることから教育は始まると確信した。そのつながりが子どもたちの安心感を生むのだ。

② 互いに尊敬し、一緒に成長する

通所している子どもたちは常に誰かに信じてほしい

という気持ちと、誰かを信じたい、つながってほしいという気持ちをもっている。

つながるためには、まずはこちらが心を開き、相手を尊敬すること。それは相手への押しつけでなく、言葉と行動で一步ずつ歩み寄る気持ちが必要である。自分を知ってもらい、「いつも君のことを見ているよ」という思いを感じてもらおう。そうすればきっと子どもたちも自分の不安な気持ちや弱い部分を見せてくれるようになるのではないだろうか。

この実習は、教師になってからでは経験することのできないもので、これこそ教師の本質ではないかと思わせてくれた。

3. 子どもと子どものつながりー10月・教師力向上実習Ⅱからー

教師力向上実習Ⅱは授業づくりについてテーマを設定し実習を行うものである。

この10月までメンターの先生に協力していただき授業実践を重ねることができ、子どもたちも自然な状態で授業を受けてくれるようになっていた。

(1) 10月時点での学級の実態

後期に入り、いよいよ高学年へ向けての準備期間に入った。全体の雰囲気は落ち着いてきたように思う。学級委員や係活動に主体的に取り組む姿も見ることが出来る。掃除の時間は縦割りで高学年のサポートや低学年の世話をしている。つまり自分たちで考える場面や機会が増えてきたということだ。学級でも挙手発言が増え、全体が授業に集中できている。

しかし、一斉指導の場面で発揮できる力が、グループ活動になるとどうしても衝突などが起きてしまっとうまくいかない。観察していると互いに主張するばかりで、相手の意見を聞いてグループで練り上げていくという姿勢がないとわかる。

(2) 実習計画

① 教師力向上実習Ⅱのテーマとねらい

既述したような課題が見えてきた学級の中において、どのような実践を行うか。そこで以下のようにテーマを設定した。

「算数的活動を取り入れた、

児童が感動できる授業づくり」

ー「面積」の授業を通してー

そして実習のねらいは以下のように設定した。

- ・直接比較や間接比較のステップを大切にし、児童が実際に操作する活動を多く取り入れることで、全員が実感し、発見する楽しさのある授業づくりをする。
- ・各授業スタイルにおける効果的な教材・教具の活用を考え、単元計画を立てる。
- ・個人で理解したものを全体で共有し深めるとともに、児童の関わり合いの機会を設ける。

② 授業におけるつながり

学級づくりの視点や人としてのつながりについては今までの実習から学ぶことができた。そこで今回の実習は教科指導の中で、どのように子ども同士のつながりを設定するかということ考えた。

現在、教育技術が進歩していく中で、インターネットや電子黒板など教材・教具も充実してきた。しかしそれを使う前に基本的な授業力を身につけることが重要だと思う。それを身につけることで、学級経営に生きる縦や横のつながりをもった教科指導の展開が行えるのではないだろうか。

教科ごとの本質をとらえ、単元ごとの特性をつかみ、指導方法ごとのメリットとデメリットを理解することを重視して、子ども同士のつながりのある教科指導を行っていきたい。

③ 教科の本質をとらえる

授業の中でつながりを築こうとした時、それが授業本来の目的である基礎・基本の定着や、学習内容からかけ離れてしまうようでは良い教科指導とは言えないだろう。

そのため私は実習にあたって、志水先生からご指導をいただき、まずは面積という単元がもつ特性について理解を深め、教科書を分析することから始めた。教科の分野内における縦のつながりや横のつながりを理解し、それに必要な力と身につけるべきスキルを把握しておかなくてはならない。

教科や単元に対する理解がなければ、学習を効率的に展開する学習スタイルの選択や教材・教具の選択も難しい。よって単元計画や一時間ごとの展開の設定も、教科や単元の特性を理解することから丁寧に始めなくてはならないということがわかった。

③ 算数的活動とは

算数科の目標でもあるように、算数の授業では算数的活動が目標全体にかかる形で示されている。

算数的活動とは「児童が目的意識をもって主体的に取り組む算数にかかわりのある様々な活動」を意味し

ている。「目的意識をもって主体的に取り組む」とは、新たな性質や考え方を見いだそうとしたり、具体的な課題を解決しようとしたりすることである。なぜ、「目的意識をもって主体的に取り組む」必要があるかと言えば、算数的活動を通して、数量や図形の意味を実感してとらえたり、思考力、判断力、表現力などを高めたりできるようにするとともに、算数を学ぶことの楽しさや意義を実感できるようにするためである。

ここで言う算数的活動は、外的な活動と内的な活動があると考えられる。

外的な活動・・・手や身体を使ったり、具体物を用いたりする活動。

内的な活動・・・算数に関する課題について考えたり、算数の知識をもとに発展的・応用的に考えたりする活動や、考えたことなどを表現したり、説明したりする活動。

算数は数や図形の概念形成を図る教科であるので、算数的活動はそれらの概念形成のための外的・内的な活動を意味する。つまり、具体的なものを扱いながら、「考える」活動を通して、抽象的な数や図形の概念を獲得させることがねらいである。

ア算数的活動の例

- ①作業的な活動：手や体などを使って、ものを作るなどの活動。
- ②体験的な活動：教室の内外において各自が作ったり確かめたりする活動。
- ③具体物を用いた算数的活動：身の回りにある具体物を用いた活動。
- ④調査的な算数的活動：実態や数量などを調査する活動。
- ⑤探求的な算数的活動：概念、性質や解決方法などを身につけたり、作りだしたりする活動。
- ⑥発展的な算数的活動：学習したことを発展的に考える活動。今成り立つ性質が、別の場面でも成り立つだろうかなどと考える活動。
- ⑦応用的な算数的活動：学習したことを、様々な場面に応用する活動。
- ⑧総合的な算数的活動：算数のいろいろな知識あるいは算数や様々な学習で得た知識を総合的に用いる活動。

イ算数的活動の意義

これらの算数的活動には、算数の授業を、子どもにとってより身近で楽しいものに、役立つものに、わかりやすいものに、感動あるものにしたなどの願いがこめられている。そして概念形成を促進するためには、授業中のどこで何の目的で算数的活動を設定するかが大切である。

算数的活動を取り入れることにより、以下のポイントで授業を改善できると考えられる。

- ①算数の授業を児童の活動を中心とした主体的なものにする。
- ②算数の授業を児童にとって楽しいものとする。
- ③算数の授業を児童にとってわかりやすいものとする。
- ④算数の授業を児童にとって感動のあるものとする。
- ⑤算数の授業を創造的、発展的なものとする。
- ⑥算数を日常生活や自然現象と結びつけたものとする。
- ⑦算数と他教科、総合的な学習の時間等とを関連させる活動を構想しやすいものとする。

以上のように算数的活動についてまとめてみると教科指導がどうあるべきかを踏まえて学習内容を設定していかなければいけないことがよくわかる。さらに、その単元の性質と活動の適合性も吟味しなければ効果的な活動ということとはできない。

今回の実習ではそれらをしっかりと調べ、メンターの先生と話し合いながら活動内容を設定することができた。そしてその中で子どもたちがつながる機会をどのように設定したのか、以下に実践の経過を報告したい。

(3) 実習の経過と成果

「教科指導の中でつながりの場を設定する」ためには綿密な計画、時間と場所の確保、材料の準備など非常に手間と労力を必要とする。しかしその分、子どもたちと感動を共有することができ、学びへの興味・関心を高めることができると実感した。

ここでは実習の経過として、それぞれの活動の様子を元にその活動の効果振り返りたい。

① 音声計算活動

基礎・基本の反復練習をしながら、徐々に解ける問題の数がเพิ่มด้วยやる気の向上につながる。

そして隣の子とコミュニケーションを図り、競争意識を高めたり、互いの成長を認めあったりという様子を見ることができた。ペアの活動を充実させることが、その後3人4人5人と活動に幅をもたせるために必要であると感じた。

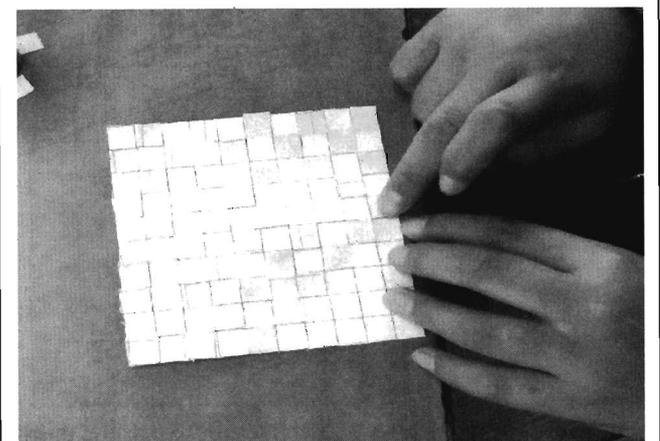


音声計算に取り組む様子

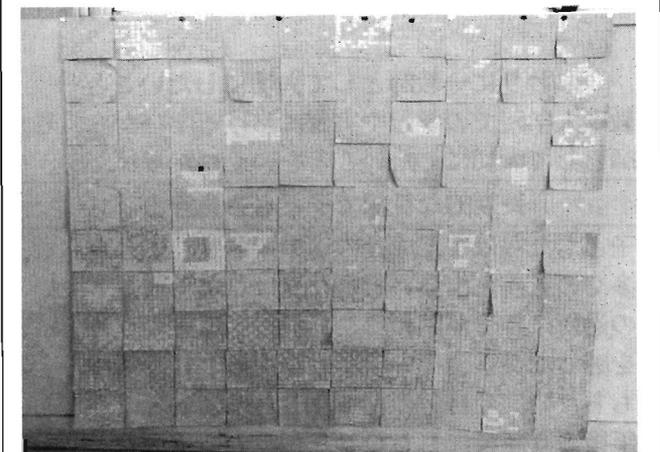
② 個人的な活動から全体へ

この活動はまず、 1 cm^2 の量感を鍛えるために 1 cm^2 の色紙を100枚貼り付けて 100 cm^2 のモザイク画を作った。次に、それを100枚作成し、 10000 cm^2 (1 m^2)の正方形をみんなで作った。

個人で作ったものをみんなで合わせることで、子どもたちの驚きの声と同時に、完成されたものが目の前にでき上がった時の満足そうな顔を見ることができた。それぞれが作成したいろいろなモザイク画にも興味をもち、互いに褒め合う姿を見ることができた。



①個人作業の様子



② 1 m^2 のモザイク画

③ グループ活動

この活動ではどのように面積を求めるか、共通の知識をもとに仲間と話し合いながら、工夫して解決することができる。教師はグループとして評価してやるのが大切である。そこで互いを認め合ったり、普段活躍することができない子に機会を与えたりすることもできた。発表もグループみんなで行うことにより一体感が生まれた。



透明なシートを使って面積を測る



新聞紙で1 m²を作成し、面積を測る

IV. おわりに一教師として大切にしたいこと一

教職大学院での学習や実習における学びから、私が教師として大切にしたいことをいくつか挙げたい。

長期的な目線で子どもを見守る

子どもたちはまだ成長の途中であり、これからもっと多くの人々と出会い影響を受けながら成長していく。その過程に自分に関わることができるということに喜びを感じながら、その手助けをするという気持ちを常にもちたい。今自分の言ったことは響いてなくても、5年後10年後にもしかしたらその一言が目の前の子どもを支えるかもしれないという心構えで根気強く子どもたちと接していきたい。

子どもの思い、願いを受け止める

この報告書でも述べたが、子どもたちは誰かとつながっていないでは生きていくことができない。まずは子どもたちの思いや願いを受け止め、心でつながることを大切にしたい。彼らが自分自身を信じ、教師を信じ、友達を信じていることができるという学級を目指して実践していきたい。

人間性の幅

私は教師になりたくて、今その夢を実現させようとしている。しかしそれが実現したことの裏には多くの人との出会いや、何よりも家族の支えがあつてこそだ。この自分の状況を当たり前のものと思わずに常に感謝し続けたい。さらに、逆に考えれば環境に恵まれなかったり自分の夢をあきらめてしまったりという子どもも自分の目の前に現れる。自分と境遇が違うからといってつながることができないようでは教師たる資格がないと思う。私自身これから多くの人や考え方に出会い人間性の幅を広げていきたい。そして子どもたちが私との出会いをいい思い出として刻んでくれるような教師でありたいと思う。

【付記】

実習は以下の学校で行った。

- (1) 学校サポーター・教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ
みよし市立三吉小学校
今瀬良江校長先生・石川すま子先生
- (2) 特別課題実習
豊田市立東保見小学校
- (3) 教師力向上実習Ⅲ
碧南市立南中学校
長久手町立北小学校
- (4) 多様なフィールド実習
名古屋市子ども適応相談センター
「なごやフレンドリーナウ

【主な参考文献】

- ・志賀廣夫編著『できる教師の10の技』（ルック2009, 8)
- ・志水廣『算数力がつく教え方ガイドブック』（明治図書 2006, 7)
- ・金森俊朗『子どもの力は学び合ってこそ育つ』（角川書店 2007, 10)
- ・齊藤孝『教育力』（岩波書店 2007, 1)
- ・菅野純「現代の子どもたちの「つながる力」」（『児童心理 2月号』金子書房 2011, 2月）
- ・岡本智周「共に生きる力」をどう考えるか」（『児童心理 2月号』金子書房 2011, 2月）